

JASIS

NEWS

No. 43

2008/11/17

日本インテリア学会会報

■ 創立20周年を迎えて

会長 高橋鷹志（東京大学名誉教授）

平成元年に創立された当学会は今年、20周年目を迎えました。これは一重に小原二郎前会長が築かれた軌道のお陰であることを改めて痛感し、小原先生に感謝の気持ちを捧げたいと存じます。この記念すべき年に当たって、学会活動としても特別な企画をすべきであると考え、総務委員会で議論を重ねた結果、まずは総会において「創立20周年記念シンポジウム」を開催することが決定されました。その結果、小原二郎先生の記念講演と、それに続く元副会長・総務委員長であった渡辺優先生を交えた対談が行われました。

更に総会の折、当学会の今後のあり方に関する会員へのアンケート調査を実施した結果、「次の20年間で『インテリア学』の確立に知恵を絞ってほしい」などの貴重な意見が寄せられました。これらの意見を参考に具体的な活動方針を総務委員会等で議論する予定です。

また今年はAIDIAの「学生ワークショップ・教官シンポジウム」開催担当年に当たっており、九州大学の湯本長伯先生が福岡での実施を引き受けてくださり、7月23～26日に開催されましたが、北京オリンピックの影響で中国からの参加はなかったようです。何れにせよ湯本先生には全ての段取りをしていただき、諸々のお手数をおかけしたことを深く感謝する次第です。

秋の大会に関しても、湯本先生が企画され、九州大学大橋キャンパスを会場に行われました。私にとっては当キャンパスは恩師である吉武泰水先生が九州芸術工科大学として創設された場所であり、先生のお招きで何回か訪問したことを懐かしく思い起こしました。翌日の長崎の街の見学会では、「海星学園（吉阪隆正設計・1958）」

をはじめ個性のある景観を堪能することができました。来年の大会場所は金沢であることも理事会で承認しています。

また、卒業作品展15回を迎え、審査委員会による優秀作品の選出が行われました。その巡回展は山脇ギャラリーの後、東京ビックサイトでのインテリア産業協会主催によるギャラリー作品展が予定されています（11月19～22日）。

最後になりますが、20周年を記念する事業に関して、会員の皆様からのご提案を戴きたくよろしく願いする次第です。

■ 平成20年度総会議事録

総務委員会 白石光昭・松崎 元（千葉工業大学）

□日 時：平成20年6月7日（土）13:00～14:00

□会 場：千葉工業大学

□概 要：高橋会長挨拶の後、総務委員会の進行で、総会議長に直井英雄氏、議事録署名人に建部謙治氏、渡辺秀俊氏、書記に松崎元氏を選出し、議事に移った。なお、定足数が満たされていることを確認し、総会を開催した（出席49名、委任状201名）。

1) 第1号議案（平成19年度事業報告および決算報告の件）について

- ・上野義雪総務委員長より、平成19年度の事業報告および決算報告があった。（詳細は決算報告の表をご覧ください）
- ・八田監事から監査報告がなされ、H19年度事業報

告・決算報告は承認された。

2) 第2号議案 (H20年度事業計画および収支予算の件) について

- ・上野義雪総務委員長より、平成20年度の事業計画および収支予算について説明がなされ、承認された。

3) 第3号議案 (平成20/21/22年度役員改選) について

- ・日本インテリア学会会則に従い、以下のように実施され、承認された。
- ・全国8支部より評議員(93名)を選出し、評議員の選挙により16名の理事が選出され、承認された。
- ・各支部長の内、上記で選出された理事を除く各支部長が理事に承認された。
- ・4月19日開催の理事会にて実施された会長及び副会長選挙の結果が承認され、高橋鷹志会長が再任、加藤力氏、直井英雄氏が副会長に選出され承認された。
- ・会長推薦枠として、松本吉彦氏、白石光昭氏、河村容治氏(教育部会)が理事に推薦され承認された。
- ・佐藤公信氏、上野弘義氏2名が、監事に承認された。

4) その他の報告事項

- ・アジアインテリア学会(AIDIA)ワークショップの準備状況について、湯本長伯氏より説明があった。
- ・第20回日本インテリア学会大会について、湯本長伯氏より、9月27日(土)28日(日)の2日間で九州大学大橋キャンパスにおいて開催され、開催に向け準備中であることが説明された。
- ・直井英雄論文審査委員長より、AIDIA論文募集の案内があった。
- ・平成21年度大会は金沢で、平成22年度は中国・四国支部での開催を検討中である旨、報告があった。

■ 平成20年度役員

- 1) 会 長：高橋鷹志
- 2) 副 会 長：加藤力、直井英雄
- 3) 名誉会長：小原二郎
- 4) 理 事：上野義雪、大森豊裕、岡田悟、加藤力、河村容治、北浦かほる、栗山正也、車政弘、小原二郎、小林謙、小松唖一、小宮容一、沢田知子、白石光昭、高橋鷹志、建部謙治、直井英雄、西出和彦、日原もとこ、松本直司、松本吉彦、湯本長伯、若井正一、渡辺秀俊
- 5) 監 事：佐藤公信、上野弘義
- 6) 運営委員長：上野義雪(総務委員会)、湯本長伯(広

報委員会)、加藤力(国際委員会)、直井英雄(論文審査委員会)

- 7) 支 部 長：小林謙(北海道)、若井正一(東北)、岡田悟(関東)、棒田邦夫(北陸)、建部謙治(東海)、小宮容一(関西)、大森豊裕(中国・四国)、車政弘(九州)

- 8) 研究部会長：内藤昌(歴史部会)、佐戸川清(デザイン部会)、栗山正也(計画・構法部会)、白石光昭(人間工学部会)、河村容治(教育部会)、直井英雄(住宅部会)、川島平七郎(CAD部会)

■ AIDIA アジアインテリアデザイン学会・九州 ー学生ワークショップ・プロフェッサーシンポジウムー

大会委員長 湯本長伯(九州大学大学院)

副委員長 上和田茂(九州産業大学工学部長)

□ AIDIA 事業の概要と学生WSの位置づけ

2008年7月23日より、九州大学西新プラザ(セミナーハウス)、および九州産業大学香椎キャンパス建築棟において、AIDIA国際大会の中間に行われていた学生ワークショップ、そして集まった教授・設計者によるシンポジウムが開催されました。

本年は、会長国が大韓民国から中華人民共和国に代わり、中国にて国際大会が開催される年に当たりますが、現会長国の韓国・李会長の積極的な意向によって、本年にも学生ワークショップが開催されたと聞いています。この国際的な事業は、本学会の中でも余り周知度が高くなく、国際委員会(委員長：加藤力・宝塚造形芸術大学教授)だけの事業のように感じている印象もありますが、極めて意義のある国際事業であり、このグローバル化した国際社会の中で、益々重みが増して来る事業でもあると思われるので、開催の経緯からやや詳しくご報告しておきたいと思います。なお、この10月21日から23日まで、中国河南省鄭州にて国際大会(隔年に会長国内で開催という決まり)が開催されています。従って、2年後の2010年には、日本国内にて国際大会という順番になります。

- ・2年ごとに会長国交代、新会長国にて国際大会を開催
- ・大会の翌年(従来は隔年)に学生ワークショップ(＋付随行事)を開催
- ・毎年(以前は隔年)AIDIAジャーナル(論文は査読付き)を発行
- ・交代した2年間は、会長国が最終決定権を持って事業を執行する

□開催経緯

2008年2月1日、佐賀県唐津市虹ノ松原にいた湯本に、西出事務局長から1本の電話がありました。学生ワークショップの開催に関する打診で、2008年度大会を開催予定だったこともあり、また上記のような国際会議の位置づけも考え、お引き受けしました。この時点では開催時期も未定で、ただ開催を計画する場所の情報をお伝えただけでした。その後、5月に李会長、Helena Yun(尹)事務局長、崔委員が来福され、予定会場(九州大学・九州産業大学)や福岡市内を視察され、開催が本決まりとなりました。また高橋会長も事前に来福され、会場等を視察されています。

この後に会期を決定するのですが、李会長からあった7/23～26(水～土)は4日間と長いこと、JASIS高橋会長も湯本も26日には予定があったことから、23～25日の3日間で調整し会場の予定も押さえました。ところが実際には7/23～26(水～土)の4日間で開催が決定され、正式決定として日本側に伝えられました。最終決定権は会長国にあるとは言え、会場国の都合が全く無視される決定には、大きな疑問が残りました。これは今後の大きな課題であると思います。会報にて報告して、今後の改善に向けての申し送りとしたいと思います(3国の意思決定体制が不明確)。

その後、国代表スピーカーの決定(石田壽一・東北大学教授/3月まで九州大学教授)、プロフェッサーシンポジウムでの発表者(加藤力・前掲、湯本長伯・前掲)の決定があり、また学生ワークショップへの参加者(九州大学6名、九州産業大学5名)決定、同指導教員(上和田茂・九州産業大学工学部長/教授、平井康之・編集委員/九州大学准教授、野崎勉・愛知高等工業専門学校教授)決定と続きました。

もう一つ大きな問題は、北京五輪の直前に会期が当たった影響で、様々な制限が国内外に行われ、中国の参加者が教員・学生とも出国できなくなってしまうことでした。そのため、予定と異なり今回は日韓2国だけの開催となりました。このことは、準備に奮闘した韓国委員の努力を若干損なうことにもなりましたし、事業の収支にも影響を与えました。これもまた、今後に向けた課題の一つと言えましょう。

□会期内概要

・韓国参加者は21日に入国し、東京等の見学を経て23日に来福しました。

1) 第1日(7月23日):担当:石田、加藤、湯本、上和田、野崎、平井

先ず学生・教授ともに宿舎としたJALシーホークホテルに入り、午後には近くの九州大学西新プラザにて集

合、定刻に開会式が始まりました。

李AIDIA会長(韓国KIID前会長)、加藤JASIS会長代理(副会長)の挨拶の後、参加者の簡単な紹介を行い、国別スピーチが行われました。テーマ「サステナブルな環境とデザイン」

大韓民国代表から、韓国の伝統的な住居を分析しながら、リフォームしつつ新しく生まれ変わらせる事例を紹介。伝統的なものを全部壊してしまうのではなく、更新しつつ持続させることと、伝統的なものの中にある二酸化炭素排出の少ない持続的な環境を持続させることが述べられた。

日本国代表の石田壽一氏(東北大学教授)からは次の話があった。地球が温暖化し、海拔高度の低い国では海水の進行により陸地が減少して、大きな問題となっている。しかし既に中世から、僅かな陸地を工夫しながら居住地とし、国土の相当部分が海水面より低い環境の中で生き抜いて来た、オランダのこれからの国土の在り方と、卓抜な計画と工夫が紹介された。自身がオランダ市民権を持つ石田教授は、温暖化による海水面の上昇を避けられないものとして、彼らの町を造る知恵と工夫を紹介した。また併せて、九州大学においてここ数年間行ってきた、テンポラリーな建築空間の試み(苦勞)と、その効果についても述べられた。

開会式終了後、建物内のロビーを会場に、韓国から運ばれた様々な飲食物を肴に、オープニングパーティが催された。時節柄か寄付金なども余り集まらず、大会の収支が良くない中での主催国の工夫であったが、お国柄も現れていて良い試みであったと言えよう。

2) 第2日(7月24日):担当:加藤、湯本、上和田、野崎、平井

貸切バスによって、学生および指導教員は、福岡市内のテーマに関係すると思われる建築環境を見学した。夜はホテルに戻り、シーザー・ペリ設計のオレンジリー内のレストランで、グループ別のディスカッションを行った。2カ国の学生を任意にグルーピングし、様々な意見交換と国際交流を、指導教員も交えて行う機会である。これは予定を超えて、深夜にまで及んだようである。

3) 第3日(7月25日):担当:加藤、湯本、上和田、野崎、平井

学生は、九州産業大学建築学科の実習スタジオに移動し、様々な議論を行いつつプレゼンテーションの準備を行った。翌日の発表まで時間がないため、特別な配慮を戴いてスタジオ内で深夜まで頑張る学生もあった。

一方、前述の西新プラザでは、プロフェッサーシンポジウムが行われ、日本の発表者は加藤力、湯本長伯であった。講演タイトルは、加藤「私でない私のインテリ

ア、私がない私のインテリア」、湯本「知的財産権とデザイン」であった。

4) 第4日(7月26日):担当:石田、加藤、上和田、野崎、平井

最終日として先ず学生の発表が行われ、参加教員からの講評と表彰がなされた。その後、名残りを惜しみつつ閉会式となり、午後には空路、韓国参加者は帰国の途に着いた。

□今後の課題

開催事業の規模や頻度について、韓中と日本にはかなり温度差がある。背景には、産業界や官界との結びつきが中韓とも強く、全く協力関係が無い日本インテリア学会に比べて、社会的影響力・財力に大きな差があることがある。国際ジャーナルの発行については、既に直井英雄・論文委員会委員長の地道な努力もあって、学会としての日本が十分対応可能な部分であり、実際に毎年発行が定着しても、一定数の応募者もあって、さほど大きな問題はないと思われる。しかし国際大会やワークショップ・シンポジウムは困難がある。

前回の国際大会(2004年)は、日本インテリアプランナー協会協議会・日本インテリアデザイナーズ協会・インテリア産業協会の協力で有明のビッグサイトで行われ、それなりの規模と質が確保されたが、いつまでも他協会に頼ってばかりはいられない。次回に向けて、現状では大きな問題が横たわっていることを指摘しておきたい。

□AIDIA九州・実行委員

- 1) 委員長:湯本長伯、副委員長:上和田茂、平井康之、委員:石田壽一、野崎勉
- 2) 九州支部長:車 政弘(九州産業大学芸術学部・教授)
- 3) 学生:池定夏、井上浩介、小林咲栄、中川みわ子、中橋さゆり、福丸諒(以上、九州大学)、島田真理子、椎葉哲也、山本豊、前畑匡史、仁田将矢(以上、九州産業大学)

4) AIDIA概算

◆出金の部:合計 447,200円

<項目>	<金額(円)>
AIDIAへの負担金	130,000
会場費	86,200
宿泊費負担	156,000
学生参加費	55,000
諸経費(移動)	20,000

◆収入の部:合計 447,200円

学生本部負担	367,200
--------	---------

九州本部

80,000

◆その他(九州大学負担):合計 255,000円

詳しい日程等は、ホームページに掲載されているので、ご覧下さい。

[http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/\(index.html\)](http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/(index.html))

■ 第20回インテリア学会大会の報告

実行委員長 平井康之(九州大学大学院)

大会長 湯本長伯(九州大学大学院)

本年度の大会は、9月27日(土)、九州大学大橋キャンパスにて行われました。

本年度の大会には、昨年度までと異なる幾つかの変更点がありました。このことから、ご報告します。①会長の指示により、見学会と発表会との順番を入れ替えたこと、②従来は発表会だけに出て帰る方もあったが、学会活動振興のため基本的に2日間を想定した会期としたこと、③福岡大会ではなく九州大会と考えて、見学会は長崎に移動して開催したこと、です。日程・概要は以下の通り。

【前日】理事会開催、卒業設計展の設定、懇親会(会場:石蔵)の開催

【当日】9:30開会式、4室(うち1室はパネル会場)で発表会、長崎に移動

【見学会】「長崎の近現代建築と街作り」歴史文化博物館(黒川紀章設計)、長崎美術館(隈研吾設計)、長崎中華街、長崎海星学園中央館(吉坂隆正設計)、13番館(旧領事館建築/活水学園内)、大浦天主堂等

長崎駅(バスセンター)および福岡空港にて解散し、すべての日程を終了しました。

九州支部としては、AIDIAに続く大きな行事で財政的にも負担が大きいことでしたが、支部活性化には十分繋がったかと思います。来年は、北陸支部(棒田支部長代理)が担当して、金沢で10月に開催されます。

○発表題数 47 ○発表者総数 114

○参加申込数 94 ○懇親会参加数 49

○見学参加数 38 ○丸山料亭花月会食・見学 24

□大会収支

◆出金の部:合計 1,713,857円

<日付>	<項目>	<金額(円)>
9.22	論文梗概集	250,000
9.25	茶菓代	1,050

9.26	手土産代	9,975
9.26	博多石蔵酒造での懇親会40名参加	215,540
9.26	懇親会後のタクシー移動	15,200
9.26	ホテルソラリア宿泊	13,420
9.26	学会準備弁当代	6,300
9.27	学会参加者弁当代	50,000
9.27	レンタカー①(ガソリン代含む)	49,107
9.27	レンタカー②代金	10,027
9.27	レンタカー②ガソリン代	1,825
9.27	長崎宿泊37名	203,500
9.27	料亭花月交流会24名参加	367,227
9.28	長崎歴史博物館	17,280
9.28	長崎県立美術館	11,520
9.28	桃華園昼食	59,850
9.28	大浦天主堂	9,250
9.28	駐車場代(レンタカー及びバス)	9,130
9.28	高速代(レンタカー)	10,820
9.28	運転手タクシー代	1,100
9.28	運転手弁当代	560
9.28	貸切バス代	175,604
9.28	謝金	213,000
9.28	長崎手土産代	1,050
9.29	検討会	8,800
9.29	昼食代	2,460
10.15	重複支払返金手数料	262
	合計	1,713,857

◆収入の部：合計 1,662,000

<日付>	<項目>	<金額(円)>
9.26	本部から補助金	450,000
9.26	懇親会(石蔵)	238,000、9,000
9.27	学会参加費	195,000、10,000、48,000
9.27	発表登録費	45,000
9.27	弁当代	30,000
9.27	長崎花月	270,000
9.28	見学会	324,000、13,000
10.14	インテリア産業協会	30,000

◆収支：151,857円

- *備品として会場校が負担：208,135円
- *赤字分(約5万円)は、九州支部が負担
- *見学のための入場料金(4万円弱)は当初想定していなかったため、その分が赤字になりました

□研究発表会：*座長による講評第1報を本誌に別掲



◀ 口頭発表風景

パネル発表風景▶



□卒業設計展

教育部会長 河村容治
(東横学園女子短期大学・教授)

1) 第15回卒業作品展および巡回展の開催

2008年9月27日(土)九州大学大橋キャンパス多次元デザイン棟にて第15回卒業作品展を開催した。全国の大学・短大・専門学校・工業高校より選抜された40作品を展示した。以前に比べ作品の提出形式が整ってきたのが目に付く。デザイン系の作品だけでなく、研究を基にしたパネル作品もあり、テーマに広がりを見せる。昨年に引き続き東京の2ヶ所で巡回展を開催する。山脇ギャラリー展では、オープニングパーティを開催した。出品者も多く出席し、受賞者によるプレゼンテーションもあった。

◆山脇ギャラリー展：2008年10月9日～20日

◆インテリアフェスティバル2008：ギャラリー作品展
(東京ビッグサイト)2008年11月19日～22日

2) 卒業作品展優秀作品の選出

9月27日(土)12時から展示会場にて審査会を実施した。最優秀作品は1名の予定であったが、最終選考に残った広島大学大学院と相山女学園大学の作品は甲乙付けがたく、2名とも最優秀賞に選出した。前者は港の施設計画で、ランドスケープや建築だけでなく、インテリアとしても密度の高い作品であった。後者は、ダンボールを素材とした照明器具で、ダンボールの特性がよく研究され、デザイン的にも優れたものであった。

【審査委員会】

審査委員長：高橋鷹志(学会会長)

委員：大会長 湯本長伯

大会実行委員長 平井康之

教育部会長 河村容治

教育部会幹事 見城美子

【受賞者一覧】

<最優秀作品賞（2名）>

広島大学大学院工学研究科 隈部俊輔
椋山女学園大学生生活科学部生活環境デザイン学科
熊田ひとみ

<優秀作品賞（3名）>

愛知産業大学造形学部デザイン学科 内藤萌
千葉工業大学工学部デザイン学科 大門めぐみ
武蔵野美術大学造形学部工芸工業デザイン学科
渡辺優子

<奨励賞（2名）>

岐阜県立高山工業高等学校インテリア科 小笠原健太
熊本県立八代工業高等学校インテリア科 竹田桃子



▲卒業設計展風景

□見学会感想（長崎のエクスカッション）

村上晶子（明星大学建築学科教授
・村上晶子アトリエ代表）

日頃、教会の設計に関わることが多く長崎は頻繁に訪れているが、今回の見学会では得がたい経験をさせていただいた。まず、何とんでも前から一度は行ってみたいと憧れていた丸山の花月である。アプローチの灯路に沿って、わくわくしながら段を登っていくと、意匠をこらした丸窓や巨大な赤い提灯が出迎えてくれる。卓袱料理は目にも楽しく、円卓の程よい距離感も、ちょうどお酒がすすんでいく。数寄をこらした内部は長崎の異国情緒もあってハレの気分を昂揚させられ、良い（酔い）時間をもつことができた。翌日は歴史文化博物館（黒川紀章設計）とながさき美術館（隈研吾設計）を県の方に丁寧にご案内いただき、中華街の桃華園での昼食を経て、午後は吉阪隆正設計の海星学園に登ることになった。長崎港を一望できる東山手の高台、長崎で最も長崎らしい場所に位置し、敷地内には修道院をはじめ4校舎、図書館、体育館、寮など数々の施設がある。カトリックの校訓をもとに人間育成を目指した学校である。吉阪さんの作品らしさが随所にあり、すべて違う木製窓や階段の盛り上がるディテール、楽しい水のみ場など楽しい場所が随所にある。敷地を生かした階段空間はバリアフリーとは程遠く足腰が鍛えられる学校である。案内してくれた学生さんも建物を誇りに思ってくれていて楽しそうであ

あったのが印象的であった。その後、長崎の領事館や250年の空白の時間を経て信者が発見された大浦天主堂などの歴史的建築を見学して帰途についた。

□年次大会九州・実行委員

- 1) 実行委員長：平井康之
- 2) 大会長：湯本長伯
- 3) 大会副委員長：上和田茂、森永智年
- 4) 事務局委員：佐藤恭子、松尾春香、畑山知子
- 5) 九州支部長：車政弘
- 6) 学生：池田妙子、井上浩介、金度 明、小清水裕子、堀田純希、本田晃浩（九州大学）

■ 20回大会研究発表講評（第1報）

□計画②（インテリアエレメント）

005 扉の開け方とドアノブ・ドアハンドルの形状との関連について（その2）：本研究は扉の開閉における人の行動と心理が、ドアノブ・ドアハンドルの形状やディテール、位置や配置などによってどのような影響を受けるかについて明らかにしようとする研究であり、従来から得られているいくつかの知見の検証的な研究といえる。現段階の調査は紙面上で行われているが、実物大での実験・検証が望まれると共に、文化や習慣、属性をどのように分類、整理していくかが重要となる。

006 学校教育施設内におけるサイン計画～地域開放に向けての現状と展望～：本研究は増改築によって複雑化した既存建物のサイン計画について、マニュアルを作成し、サイン計画の立場から学校教育施設を誰もが使い易い空間にすることを目的とした研究である。提案されたマニュアルはごく一般的な内容であるとの質問があったが、現段階での成果からはその指摘は妥当なものと思われる。現在のような内容であれば、良い実例を集めてデータベース（平面図、写真、コメントを含む）化する方が参考になるのではないかと思われる。なお、原稿のフォーマットが異なっているため、文字量が少なく、内容を十分伝えきれていない点もあると思う。注意をされたい。

007 インテリアにおけるパターンコーディネートの実証考察Ⅰ：筆者が長年継続してきた「インテリアにおけるパターンコーディネートに関する考察」をもとに、建築・インテリアの実例を挙げて、実証的に考察することを目的とした研究である。今回は事例を3つ挙げ、筆者の提案するパターンコーディネートから得られるはずの空間印象評価と事例の印象評価が整合していることを述べている。パターンも大切であるが、筆者も書いてい

るようにマテリアルやカラーも重要である。大変難しいとは思いますが、例えば、あるケースではマテリアルのコーディネートが最も印象評価に影響し、あるケースではパターンコーディネートが影響が強いなどといった判断ができるようなシステムへ展開できるとさらに良いと思われる。

008 住まい方とエネルギーに関する調査研究：本研究は、生活シーンの消費電力を居住者自身が簡単に把握できる「10分間測定法」を居住者自身が行い、住まい方とエネルギー消費との関係に「気づき」を与えることで、どれだけ省エネ生活を実現できるかその効果を求める研究である。しかし、研究対象期間が寒くも厚くもない6月であるため、大幅な削減はできていない。「気づき」を与えても、それが省エネに繋がるようなエネルギー消費の大きい電気製品を使っていない点が原因であろう。夏季や冬季におけるデータも収集し、年間の省エネ量を推定していくことにより、効果を確認できるものと思われる。また、長期的に見れば、私たち一人ひとりの意識が大きな影響を持つことを考えれば、意識付けの方法として興味深い。(座長：白石光昭)

□計画④ (ライフスタイル・プログラムデザイン)

計画④ ライフスタイル・プログラムデザイン

013 (肉丸ほか) は、産学連携における大学内店舗のインテリア計画の基礎的研究として、広島市及び近隣の10大学の大学概要と大学内店舗の具体的な店舗形態や取扱商品等を調査し、産学連携の全体的な可能性を探るために、大学内店舗の現状を明らかにしている。店舗運営に関して研究室・学生が参画しやすいのは「単体」の店舗である事、また、学生個人が課題制作に取り組む建築系や芸術系分野は産学連携しやすい事等が導かれている。今回の結果をどのように反映させるのかについて議論がなされ、今後は具体的な方向性に向けての発展が期待される。

014 (浅沼ほか) は、013の継続であり、大学内店舗と学生に対して、商品やサービス、利用状況、店舗に期待する事柄、問題点等に関してアンケート調査を実施し、大学内店舗側と利用する学生側からの現状・課題を明らかにしたものである。減少している大学内店舗の売り上げに対する解決策の一つとして、産学提携しての、商品構成や店舗計画、新商品開発や新しい売り上げルートの開発の必要性を指摘している。商品構成や商品開発の際には、売れる見込みについても考える必要もあるのではないかという意見も出され、今後は、これらも含めて、産学連携における大学内店舗の新しい展開が期待される。

015 (申ほか) は、韓国におけるブランドアパートの新しい競争力として浴室設備を差別化するために、ア

パートの坪別居住者タイプを分析し、それぞれにふさわしい浴室計画を提案しようとする研究である。ソウル及び近隣地区において実施した調査結果より、一般的に、坪数が多いほど居住者の収入が多く、共に住む子の年齢層も高くなることが明らかになった。また、多様な居住者に対応できるように、主タイプ以外に、坪別の予測可能な家族形態を副タイプとしてまとめている。日本ではアパートの場所や部屋の位置等の影響もあって坪数と価格は必ずしも一致しないため、韓国の状況に関して質問があったが、韓国では、坪数とアパートの価格は比例するということがあった。発表では各タイプの浴室計画案も提示された。

016 (鈴木ほか) は、快適なセカンドライフ (定年退職後の生活等) の「住まい方」を探るために、セカンドライフの暮らし方をどのように考えているかについてアンケート調査をした結果報告である。セカンドライフの住まいの確保に関しては、現状のままの住宅での居住か住み替え希望が多い事、また、戸建住宅の場合の住まいのタイプや、リビングやダイニングのタイプ、キッチンの広さ、寝室のタイプや夫婦同室/別室等の希望に関して、年代別、男女別の傾向を見いだしている。新しく始めたいライフスタイルの内容や、年齢別セカンドライフの考え方についての分析等、今後のセカンドライフを考える上で重要と思われる事柄の指摘もあり、これらも含めた展開が望まれる。

017 (村上) は、カトリック教会における典礼 (プログラム) の刷新から与えられた教会空間の変化に関連し、中心 (祭壇、内陣) と席配置関係に着目して、現代の教会の実例と聖イグナチオ教会旧聖堂とを比較している。祭壇から信徒席までの距離と角度から、現代の教会は、聖イグナチオ教会旧聖堂に比べて「よく見えてよく聞こえる」建築空間として作られ、また、席から像や十字架等のシンボルを見る角度も自然に仰ぎ見る関係となっていることが示された。祈りの所作について議論があり、信徒相互に関わる祈りの所作も含めた分析への進展が期待される。(座長：ペリー史子)

□人間工学① (作業姿勢・生理)

このセッションの4題は、いずれもオーソドックスな人間工学研究であり、それぞれきちんとした内容を持っていると評価できるものであった。以下、司会の役目であるので、個々に若干の注文や参考意見を述べさせていただく。

018は、キッチンの照明環境の必要条件を明らかにしようとした研究である。必要条件に関する文献調査や実際の照明環境の実態調査は一通りされているが、その評価に関しては、被験者1人の評価結果しか得られておらず、客観性という点で十分ではない。タイトルに (1)

と付されているから、(2)以降においてこの注文に添えてくれるものと期待しているが、その際、タイトルとして「身体負担に関する」というのが果たして適当であるかどうかについても、合わせて検討していただきたい。

019は、キッチン作業時の踵高さ、あるいはそれによって規定される足関節角度が、作業姿勢、特に筋負担に及ぼす影響を明らかにしようとした研究である。研究の結果、足関節角度10度前後が、もっとも負担を軽減する可能性があるとの明確な結論が導かれており、客観性、実用性とも十分な研究であると評価できる。あえて希望を言えば、古くから言われている作業者の身長と作業台の高さとの関係に、この問題がどう関わってくるのかについても言及していただきたい。

021は、オフィスにおけるVDT作業と採光の条件との関係に関する研究だが、これまで多く行われてきた同種の研究と違うユニークな点は、作業者の定年までの残務年数との関係が論じられている点である。残務年数が少なくなるほど机上照度が高くなり、したがってVDT作業環境としては必ずしも最適な環境とはいえないことが、データに基づいて明確に結論づけられている。おおいに評価できる研究であることは言うまでもないが、同時に身につまされる研究でもある。

022は、動線に着目したインテリア空間の評価に関する一連の研究のなかで、人間の左廻行動を採りあげ、その根拠のひとつとして人体各部位の左右差を測定したものである。様々な項目に関し、きわめて明確な左右差の測定結果が示されており、興味深い。今後に向けて、できれば被験者を増やすなどのデータの充実と、左廻行動とインテリア空間の関係の追求を期待したい。(座長：直井英雄)

□人間工学②(その他)

022(穴沢他1名)は、歩行を形成する人体側の因子を探るために、歩行者の左右の人体計測値の比較や様々な条件下における歩行動作の実験を行った。その結果、人体計測値や身体重量は右側の数値が大きくなり、閉眼による足踏みや短距離歩行などでは左に偏る傾向などが指摘された。この他、180度の曲がり通路の歩行軌跡や足裏の接地面積や圧力などを測定した。以上のまとめとして、歩行時に左足を軸足、右足を蹴足とする傾向等がみられ、右側よりも左側に逸れる人体構造があるのではないかと考察している。本発表に対して、その結果を具体的にどんな場面に応用するのか、被験者の利き勝手の違いによる比較検討の必要性などの質問があった。本編は、従来指摘されてきた左廻りの歩行特性に着目して、多様な身体的側面から捉えようとした点を評価したい。

023(大竹他2名)は、不特定多数の集合の場面など

において複数の固体間に他人が入りにくいとを感じる個人領域(以下、SPS<セミ・パーソナルスペース>)の存在に着目して、その心理的領域を実験的に計測して検討した続報である。特に、前報で二個体間におけるSPSの存在を確認したことを踏まえて、本編は、三角形の各頂点に配置された三個体間のSPSなどを実験的に計測して、人間の集合密度などの算出を試みたものである。なお、本実験で配置された三個体は人形型のダミーで、その身体方位は三角形の中心に向かって外向き、内向き、横向きの3つのパターンとした。本発表に対して、三固体の身体方位には同一方向を向くパターンも考えられないか、被験者の男女差がなかったのかなどの質問があった。本編は、独創性が感じられる研究で、今後の進展に期待したい。

024(上野他1名)は、発表者らが行ってきた長年のいすの研究を踏まえて、事務用いすを選択する場合に、使用目的に対応したいすであるか否かを評価する項目を整理して選択マニュアルとして一覧表にまとめたものである。当該選択マニュアルでは、事務用いすの各部位・性能などの諸項目に対する内容が説明されている。本編では、いすに対する学校教育の必要性などが指摘されていることに注目したい。本発表に対して、今回提示した選択マニュアルの内容は、いすのメーカーに向けたものなのか、我が国におけるいすの業界における今後の展望なのかなどの質問があった。「いすの研究」の新たな進展に期待したい。(座長：若井正一)

□歴史

025(ゾン)は、中国・韓国・日本の三国における主たる共通食道具としての箸に着目し、中国から発した箸の使用法が、現在の三国で異なることを歴史的に調査・考察した論考である。その結果、米の粘度や食材の調理法や食事法などの食文化の違い、あるいは湿気などの気候の違いから、中国は箸とレンゲの併用、韓国では箸と匙をセットで使用し、日本ではほぼ箸のみになったとし、各国の伝統・社会環境によって、箸が伝播・受容・変容してきたと考察して、このような考察が今後の国際化時代の食文化を提案するための基礎となることを指摘している。惜しむらくは、梗概に図版・図表がないことで、さらに整理してより明解な図表などの提示を期待したい。

026(堀邊)は、鎌倉の建長寺と円覚寺における塔頭の成立過程に着目し、禅宗寺院における空間認識に関して考察した論考である。両寺の空間構造を比較・考察すると、同門派の塔頭が集合して配置される、開山の門派の塔頭は開山塔周辺に集合している、という共通点が見出され、その結果、その宗教独自の性格が聖域を作り、聖域を中心にその宗教独自の性格を背景とした派閥が生

じ、その派閥から聖域が広がるといった、〔舍利信仰→開山塔→門派抗争→塔頭〕という宗教空間形成の経緯がみられるとしている。

インテリアというよりエクステリアに及ぶ異色な論考であるが、宗教と空間を相互に関連考察した視点は、インテリア空間を考えるうえでも今後期待される視座といえる。

027 (塚口) は、モダンデザイン成立の背景を、アヴァンギャルド住宅出現におけるクライアント像から探った論考である。その結果、アヴァンギャルド性の強いモダンデザインの住宅のクライアント像の共通点として、*女性が施主か、あるいは女性のイニシアチブによる住宅、*裕福な階層の出身で高学歴女性、*思想的にはラディカルで社会活動家、社会活動のための住宅、*通常の家族とは異なる構成メンバー(独身者や非婚主義、複合家族)、という指摘をしている。会場から「現代にも通じるのか」という質問に対し、「おかしな時代だからこそ出来た」と回答した。

現今、不透明な将来であるだけに、今後のクライアント像を解するうえでも歴史的に興味深い論考であった。

028 (小川ほか) は、20世紀オランダ近代建築運動及び作品研究の一考察として、今回は、J. ダウカー設計の「ENCI-CEMI」展示カウンターとA. v. アイクの「ローフラー教授の塔の部屋」の比較考察を行った、両空間の円の扱いに関する論考である。その結果、「ENCI-CEMI」における円は要素としての円であり、要素の幾何学的特質に依拠した構成方法がとられ、同時に換骨奪胎するような相対的な空間的属性を獲得しており、常に対立を内在させた空間性を有していると推察し、「ローフラー邸」における円は構成としての円であり、実態としての円要素はないものの、要素配置における全方向性などからファン・アイクの円に関する発言との類似を指摘可能であるとして、経験条件に依拠して対比的な性格に転換する空間と推察している。インテリア空間設計の背景を読み込んだ論考で、異論もありそうな考察であるが、アイクの円に関する考えは今後の課題としており、その進捗が期待される。

029 (高橋) は、C・R・マッキントッシュの家具デザインの特徴に関する一連の論考で、今回は、マッキントッシュの家具における斬新な色使いと、特徴的な基盤格子・雷文、日本建築にありそうな木鼻形、大空間のなかに低く配した天井のデザインなどの特徴を指摘している。とりわけ、これまであまり知られていなかった原色に近い色使いは注目に値する内容であるが、梗概集がモノクロなので、発表会場でのパワーポイントを見た人だけが、このことを知るにとどまることは残念であった。梗概集の一部にカラー図版を入れるなど、編集方針の今後の課題といえよう。(座長：河田克博)

□その他

030 (小川ほか) ウッドセラミック切りくず粉の内装材への利活用 ウッドセラミックの切りくず粉を塗料に混合し、VOC吸着剤としての吸着性能実験を行ったものである。その結果、ウッドセラミック焼成温度が低い500℃～600℃の場合が多穴度が多いことで吸着面積が増え、吸着性が高くなることが示された。さらに、備長炭や活性炭との性能比較を行った結果、初期時間の吸着力は多少劣るが長時間の累積吸着量では同程度の性能結果が確認できたことが示された。問題点としては、普及型のVOC吸着対応石膏ボードと比較すると施工面の問題からコスト高になる。施工面での改良と吸着性能を維持することができれば、新たな木質リサイクル材活用の実用的展開として期待できそうである。

031 (滝本) ブラックライト照射による樹脂光効果に関する研究 蓄光材と蛍光材を樹脂に混入した「蓄蛍光素材」の開発のためにその配合率と発光効果の関連を明らかにする実験を行ったものである。その結果、蓄光材2.5～5%、蛍光材0.5～2%の範囲での配合で「蓄蛍光素材」の有効な発光効果が確認できたことが示された。また、「蓄蛍光素材」の残光時間が、蓄光材のみものと比較して長いことが示された。ただし、蛍光材の配合は0.1%までが有効で、それ以上は残光効果に寄与しないことが指摘された。今後の問題としては、蓄光材と蛍光材の比重が異なることによるパウダーの沈殿分離を防ぎ、均一な混合を可能にすることがある。今後の成果に期待したい。

032 (中野ほか) テーブルスケープデザインに関する研究-2 女子大生を対象に「食事が美味しいと感じる食環境」について調査を行ったものである。その結果、親しい人と一緒に食事をするのが美味しく感じるために最も重要なことであること。空間的環境としては、自分の家や自然のなかでの食事など、落ち着く清楚な環境であること。食卓の状況としては、楽しい会話と母親手作り料理、料理の盛り付けが重要であることが指摘された。今後の展開では、幅広い年齢層を対象にした調査を行うことが示された。孤食等への問題解決への具体的な食環境の提案へ展開されることを期待したい。

033 (加藤ほか) インテリア空間に表出される精神の病みに関する調査 前回までの予備調査をもとに精神に病みを持つ人のインテリア空間と病みの関連性とインテリア空間の側からの解決方法の手がかりを探る調査研究の枠組みを示したものである。調査分析の手法としては、写真投影法とプロトコル分析結果から分析軸を設定し総合的に考察することでインテリア空間と精神の病みとの関係を明らかにしたい旨の研究の枠組みが示された。他者からの否定である虐待、他者からの逃避である引きこもりなど、本来の自己が存在しない歪められたイ

インテリア空間の研究的意義は大きい。今後の研究展開とその成果に期待したい。(座長：森永智年)

□パネル部門②(住宅)

038 [FENCE HOUSE II] (今井) は都市郊外の分譲宅地に建つ戸建住宅について、快適な生活(インテリア)空間を得るための設計事例の報告である。戸建住宅はその立地周辺の環境によって様々な影響を受ける。その中でいかに外部に影響されない落ち着いた生活の場(空間)を確保できるか、常にそれが命題となる。この事例では確保したい光、風、そして唯一の景色と写る雑木林への視線、そして遮断すべき外部からの視線や雑駁な風景、騒音などを敷地を囲うフェンスでコントロールし、更にそのフェンスと建物の間でできる空間(内部空間と外部空間の間の空間)を「軒端空間」や「庭空間」として活用することで、豊かで自立した生活空間の確保を実証できたとしている。この手法は良好な外部環境が常に保障されているとはいえない都市郊外型住宅の1つのあり様だといえる。但し、道路側の「Fence」は、周囲との融和を遮断する「Wall=壁」と見える。建物は、内部空間の確保も大事だが、同時に外部=公的環境に対する負荷についても充分考慮することも大切であろう。

039 [自閉症スペクトラムにある幼児のグループワーク 実践のための環境構成に関する研究] (木村直子) は特殊な領域からの「生活環境(インテリア)」のあり方に対する研究提案の報告と見ることができ大変興味深い。通常「人」はその所属する社会の中で慣習や規範などによって約束され用意された時間・空間(環境)を認識し、自発的に生活活動をコントロールすることができる。木村が対峙するのは「独自の時間・空間を生きる」即ち「そこに用意された時間・空間を認識することなく自発的に生活活動をコントロールすることができない」といわれる自閉症スペクトラムにある幼児であり、提案は発達障害とも云われる彼らが支障なく社会生活をおくれるための療育法としての空間環境のあり方を策定し、実践している事例である。その空間構成の要点は、①学習の場を活動別に視覚的に理解し易く明確なゾーニングする。②活動に集中できるように不用な外部からの刺激を絶つ。③各々の活動エリアはいつも同じ場所にする。などの単純な空間の構成方法であるが、それによって彼達の活動の自発性を徐々に育てるための効果をねらいとしている。生活空間を計画する側もそこで暮らす側も、その慣習や規範といった事柄が希薄になりつつある現代、生活空間と人の行動の在り様を原点に戻って考えることの意味を再確認させられるテーマでもあり、更なる研究の発展を期待したい。

040 [高齢者対応インフィルの研究] (村口、中村) は、既存の集合住宅の中で高齢者がその身体能力に応じて空

間や設備を順次変更し、住み続けるための「インフィル」の研究提案である。高齢者の身体能力に変化が生じた場合に「スケルトン」を変えず「インフィル」のみを変更することで快適な居住環境を実現することを計画し、それを実際に開発し、モデルルームへ試行し検討した結果の報告である。インフィル部分は設備配管や床組みなど比較的可変しにくい「基幹インフィル」と内部建具、設備機器、家具のような変更易い「生活対応インフィル」の2つに分け、試行に当っては身体能力を3ステージ(1.日常生活に不自由なく 2.歩行には杖を使用 3.車椅子利用、家族介護必要)を想定し、第2ステージの実装モデル化を行い、インフィルの工業製品化の可能性及び施行、運用等の課題について検討を進めた。その結果、「インフィルの工業化部品化に係わる新たなルール化、モジュラーコーディネーション、工場生産と資材デリバリー設計等については未だ課題も多いが、魅力的な生活機能をパッケージにしたインフィルが、高齢者の生活を豊かなものにする事の期待も確認された」としている。

建築物の「スケルトンインフィル」方式は、今世紀の大きな課題の環境対応としても注目され期待されている。今後この領域について様々な研究、実践が進展することが望まれる。(座長：栗山正也)

■ 平成20年度運営委員会だより

□総務委員会

委員長 上野義雪(千葉工業大学)

毎年の行事である総会(6月7日(土)開催)に向けて、事務局とともに案内資料や総会資料の作成を行い、総会の準備を行ないました。また、今年度は平成20～22年度の役員(会長、副会長)を選出する年度でもあったので、その準備を行ない、皆様ご承知のように無事選挙を終えております。

総会では、昨年度の事業報告・収支決算報告を行い、承認されるとともに、今年度の事業計画の説明、予算案の説明を行い、承認を得ました。この場を借りて、会員の皆様に御礼を申し上げます。なお、総会の詳細は本号の総会報告をご覧ください。

また、総務委員会(8月29日)を開催し、今年度の事業計画に基づき、下記の議題を検討し、理事会に提案しております。理事会は本年度大会開催前日の9月26日(金)に九州大学大橋キャンパスにて開催され、参加された理事から多くの意見を頂き、これらの意見をもとに実行に向けて進めていく予定です。

- 1) 部会の再編：活動実績等を加味しながら、統合再編を考えていく。
- 2) 企業懇談会の開催：年に一度程度開催し、賛助会員への情報提供を行う。
- 3) 他学会・団体との連携：テーマにより可能な連携を進め、インテリア業界のまとめ役的な動きを目標とする。
- 4) 20周年記念事業：インテリア関連書籍の出版等
なお、本学会の活動をより活発化させていきたいと考えていますので、ご意見等がある場合はぜひご連絡ください。

□広報委員会

委員長 湯本長伯（九州大大学）

- 1) 事務ホームページの更新を、5月下旬から数えて37回行った。本年は、7月にAIDIA学生ワークショップ、9月に学会大会と、開催が相次いだため、頻度高くアップデートが行なわれた。HPの価値を高めるためにも、会員の方々の更なる更新要求・情報提供を、お願いしたい。またホームページのURLは、
<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/>です。

- 2) 広報委員会では、インテリア学会メールニュースの発行を続けています（現在25号）。

メールアドレス登録者は175名です。大会に合わせて、大会ニュースの連絡も考えて、発表者・共同発表者も一時登録させて戴きましたが、現在は平常状態に戻っています。大会を控え、迅速な連絡が可能になったと、大会委員会ともども、評価をしております。

皆様の一層のアドレス登録を、お願い致します。
<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/mail-news.html>

- 3) 会報は現在、最低でも年間3号、総会后（大会前）と大会後、及び年報（年度最終、総会前）を発行していますが、少し違った切り口の発行時期や編集内容提案があれば、対応致します。ぜひご意見をお寄せ下さい。

<http://design.kyushu-u.ac.jp/~ymtlab/JASIS/43.pdf>

- 4) 広報委員会では編集委員を公募しておりましたが、このたび以下の方々（敬称略）に加わって戴けることになりました。

若井正一（日本大学、東北支部）

片山勢津子（京都女子大学、近畿支部）

平田圭子（広島工業大学、中国支部）

どうぞよろしく、お願い申し上げます。

- 5) 広報委員会へのご意見を求めています。下記までお送り下さい。

interior@design.kyushu-u.ac.jp

または JASISeditor@yahoogroups.jp

□国際委員会

委員長 加藤 力（宝塚造形芸術大学）

- * 「第5回アジアインテリア学会報告」を本誌に別掲

□論文審査委員会

委員長 直井英雄（東京理科大学）

毎回同じ内容のメッセージで恐縮ですが、本年も11月末日締め切りで、「日本インテリア学会論文報告集19号」の論文募集をしております。ふるって応募してください。

また、「AIDIA Journal」から名称変更した「International Journal of Spacial Design and Research Vol.8」への論文応募についての報告ですが、幸いわが国から6編の応募がありましたので、国内で審査した上、制作担当の韓国に送ってあります。まもなく発刊されるものと思います。

■ 平成20年度支部だより

□北海道支部

支部長 小林 謙

*今回は報告なし

□東北支部

支部長 若井 正一（日本大学）

東北支部は、平成12年秋に発足して今年で8年目になります。既報の支部だよりの中で、第3回の東北支部研究発表会を本年3月14日（金）に日本大学工学部で開催したことをご報告させていただきましたが、発表者等の氏名が掲載されていませんでしたので、下記に改めて詳細を掲載させていただきます。

【日本インテリア学会東北支部 第3回研究報告会】

◇発表時間：1題12分（発表9分、質疑応答3分）

◇座長：早野由美恵（HAYANO）

- 1) 台所流しにおける水栓の使われ方の実態

石井睦子（日本大学大学院）

- 2) 住まいにおける食卓まわりの家族の着座特性

橋本健太（日本大学大学院）

- 3) 住宅設計コンペの参加作品からみた家族の住まい方に関する一提案 米田亜耶子 (日本大学大学院)
- 4) 自作の実務設計作品からみたインテリアを中心とした事例紹介 増子順一 (日本大学大学院)
- 5) 色彩感覚と環境要因 水野谷梯子 (東横学園女子短大)
- 6) 若者の色彩感覚における地域差の考察 日原もとこ (東北芸術工科大学)

当該発表終了後、郡山市内の料亭「東茶寮」で、懇親交流会を開催しました。なお、第4回の支部研究発表会は、本年度総会とともに近日中に開催の予定です。

□北陸支部

支部長 棒田邦夫 (金沢学院大学)

九州大会終了後の10月4日(土)に次年度の金沢大会に向けて実行委員会を立ち上げました。その席上委員の方々からは活発なアイデアや意見をいただき、大変頼もしく感じました。大会まで1年ありますが、時間というものアツという間に過ぎます。これから一つひとつ内容を詰めながら金沢での「おもてなし」を考えていこうと思っております。多くの方々の参加をお待ちしております。

□関東支部

支部長 岡田 悟 (共立女子短期大学)

平成20年度は以下の活動を計画しています。

- 1) 見学会・セミナー
 - ・日時：11月24日(月、振替休日) 13:00～17:00
 - ・会場：飯能市
 - ・内容：前半 見学会 地産地消住宅(工事中のものを含む)、後半 セミナー「百年持つ“木の家”をつくること」、講師：吉野勲氏(一級建築士事務所創夢舎主宰)
- 2) 現代インテリアの研究

関東支部は大都会東京を含んでいることから、現代のインテリアを研究する有志グループを支部内に作り、その研究成果を見学会および講演会の企画・立案という形で、来年度以降共催したい。
- 3) 支部ニュース第10号の発行(2009年3月)

□東海支部

支部長 建部謙治 (愛知工業大学)

5月24日(土)午前中に岐阜駅にて支部役員会を開催し、移動後今井裕夫氏の案内により岐阜公園にある名和昆虫博物館と水琴亭を見学した。参加者は24名で

あった。名和昆虫博物館は大正8年に開館して以来80余年間、併設の名和昆虫研究所とともに昆虫学普及のために役割を果たしてきた国内有数の民間による昆虫博物館で、設計者は武田五一氏である。また、水琴亭は広い敷地に広がる日本庭園をもつ岐阜で一番の老舗料亭である。

見学終了後は支部総会が開催された。審議の結果、平成19年度事業報告及び収支決算を、また平成20年度事業計画案及び予算案が承認され、総会後には懇親会が開催された。



◀名和昆虫博物館



水琴亭の欄間▶

□関西支部

支部長 小宮容一 (芦屋大学)

2008年4月より、関西支部支部長を拝受いたしました。奇しくも、当学会が本年20周年を迎え、この愛でたい年に支部長に選ばれましたことを、光栄と思えます。精一杯に勤めたいと考えております。

さて、早速に、支部役員選挙の投票数順の慣例でもありますが、副支部長を片山勢津子氏(京都女子大)とペリー史子氏(大阪産業大学)になっていただきました。片山氏には総務担当を、補佐に大江孝会員(パナソニック)を、ペリー氏には事業担当を、補佐に中村孝之会員(積水ハウス)を当てた組織としました。総務担当は、財務と支部全体の運営総括に当たっていただきます。事業担当は、見学会や講演会等の企画・開催を担当していただくこととしました。

4月から6ヶ月たった今、組織の他に3つの事を報告できます。1つは、支部のメールアドレスを取得し、webでホームページを立ち上げました。まだ、内容はこの原稿をかいている時点では、『コラム』に私の支部長就任の挨拶と、『活動』に第1回支部評議委員会報告と九州大学での第20回大会の報告が載っているのみです。

後は「工事中」です。予定としては、関西支部会員の第20回大会発表論文をpdfで載せようと準備を進めています。このことは、会員の発表論文を広く社会に発信することで、学会のプロモーションになり、また、論文に対する反響などにより学術・研究が高まれば良いと考えるからです。一度、検索、御覧下さい。

Web site : <http://www.jasis-kansai.jp>

Mail : jk@jasis-kansai.jp

2つ目は、支部活動と言えるかどうか、ですが、支部長としては支部会員に「論文発表・パネル発表して下さいよ」など勧誘・激励するところです。で、今回の九州大会での関西会員の発表件数は、11件でありました。下写真は、26日懇親会博多百年蔵『石焼：石蔵』での関西支部会員有志の和やかな集合写真です。



▲博多百年蔵『石焼：石蔵』での関西支部会員有志

3つ目は、見学会予定です。2年前の学会大阪大会(宝塚造形芸術大学)の折に見学しました「聴竹居」のリベンジです。あの折は、我々のかなりの努力にもかかわらず、内部をみることができず、参加していただいた皆様には誠に申し訳ない限りでした。今年になって管理者が代わり、比較的開かれた見学が可能になりました。以前にもお世話になった松隈氏にお願いし、11月8日(土)午後、大山崎山荘美術館・懇親会と合せて開催のはこびとなりました。

以上、近況と報告でした。

□中国・四国支部

支部長 大森豊裕 (近畿大学)

1) 支部総会報告

平成20年6月14日に支部総会を行い、支部役員・活動計画を承認しました。また、PD(20年度のテーマ「壁に穴を開ける」、参加者20名)の開催と平成19年度中四国支部表彰の卒業設計優秀作品の小冊子を作成しました。

2) ミニレクチャー(学生向け講演会)の開催

・No.10 講演者：石田和人氏

(石田和人デザインスタジオ)

日 時：7月11日(金)(参加者26名)

演 題：「生活を工夫する、余地ある道具たち」

ご自身のデザインへの関わりと活動について、真摯に大変楽しく講演された。学生はこれからの取組に大きな刺激を受けた様でした。

・No.11 講演者：西村正弘 氏(N Design)

日 時：10月3日(金)(参加者30名)

演 題：「模型制作の手法」

模型制作の基本的から高度な手法まで、具体的に制作過程を示されながら模型制作の手法を話された。目から鱗のレクチャーでした。

・No.13 講演者：西村正弘 氏(N Design)

日 時：10月4日(土)(参加者：28名)

演 題：「模型制作の手法」—実技編—

今回は実際に模型を作る演習で、プロの手法を垣間見た学生は、今後の設計課第に生かそうと頑張って制作をしていました。

・No.12 講演者：森 隆 氏(森建築工房)

日 時：10月24日(金)

演 題：「リフォームの施工時例について」

□九州支部

支部長 車 政弘 (九州産業大学)

今年度、AIDIA九州大会、第20回インテリア学会大会が九州・福岡で開催されました。そのいずれも、湯本先生、上和田先生はじめ九州支部会員、事務局長西出先生のご尽力によって実行することができました。支部長がまったく役に立たない状態で、大変申し訳なく思っております。

理事会でも他団体との協力態勢の問題が議論されましたが、まずは本学会の会員、そして支部会員が増えないと、活動の活性化は困難ではないかと考えられます。従って九州支部の課題は活発に活動できる会員の参加を促すことでしょうか。その上で、支部の研究交流がなされることが、現段階の大きな課題だと考えます。

本年11月22日(土)から12月21日(日)まで九州産業大学美術館で椅子の所蔵品の展覧会「歴史にすわる part 4 英国ウィンザーチェアの世界」が開催されます。(社)日本インテリアデザイナー協会創立50周年記念事業として同協会との共催で開催されるものです。

11月28日(金)15:30から、九州産業大学15号館15202教室で講演会(講師：岩倉榮利氏、講演タイトル：「日本の伝統とウィンザーチェアの融合」)の企画があり、この見学、聴講を兼ねて支部活動のあり方を相談いたしたく思っています。

■ 平成20年度研究部会だより

□歴史部会

部会長 内藤 昌 (愛知産業大学)
代表幹事 河田克博 (名古屋工業大学)

1) 幹事会

今年度第1回の幹事会を大会時の2008年9月27日(土)に開催し、次年度の見学会を大会実行委員会と共催する方向で行うこと等を検討した。

2) 見学会

今年度の見学会は、大会に合わせて大会実行委員会との共催で、2008年9月28日(日)に長崎にて開催した。とくに長崎歴史文化博物館内に再現された長崎奉行所や旧外人居留地の概要・旧12番館・大浦天主堂、そしてオプションコースのグラバー園の解説を行った。参加者は約40名。近世・近代・現代にわたる盛り沢山の内容で盛況裡に進行した見学会であった。詳細は、大会見学会の記事をごらんください。

□計画・構法部会

部会長 栗山正也 (KDアトリエ)

*今回は報告なし。

□人間工学部会

部会長 白石光昭 (千葉工業大学)

*今回は報告なし。

□教育部会

部会長 河村容治 (東横学園女子短期大学)

*本誌「第20回インテリア学会大会の報告・卒業設計展」にて報告。

□住宅部会

部会長 直井英雄 (東京理科大学)

*今回は報告なし。

□CAD部会

部会長 川島平七郎 (元東横学園短期大学)

*今回は報告なし。

■ 第5回アジアインテリア学会報告

国際委員会委員長

加藤 力 (宝塚造形芸術大学)

1) 開催地：中国 河南省 鄭州 (中国内陸部、黄河流域 古代殷の時代の遺跡)

2) 開催場所：鄭州国際コンベンションセンター (最近できた鄭京新区中央部)

3) 開催日：2008年10月21～23日

4) テーマ：IN SPACE

5) 日程：

◆10/21；登録

AIDIA理事会 (クラウンプラザ)

オープニングセレモニー (国際コンベンションセンター)

◆10/22

講演会1 (4人) 日本の鈴木敏彦氏発表
合同写真撮影、昼食

講演会2 (6人) 合間に賛助企業紹介
夕食会
表彰式

◆10/23

AIDIA理事会

分科会

昼食会 (賛助企業もち)

講演会3 (5人) 合間に賛助企業紹介

日本の迫 ケイ一郎氏発表 (北京で活躍の若手建築家)

会旗引き継ぎ会

各国代表挨拶 (加藤挨拶)

*この間会議場近くの芸術センターでパネル展示 (各国、及び中国の学生作品ほか)

6) 参加者：イタリア、オーストラリア、台湾、中国、日本、韓国、約1,000人、日本からは加藤、山内、鈴木 (招待)

7) 指定ホテル：ホリデーイン (中国人) ソフィテル (招待者ほか)、ホテルから会場へはバス搬送

8) 通訳：講演はそれぞれの母国語で行い、中国語だけに翻訳

9) その他：論文集、作品集はまだ未作成。

10) AIDIA理事会決定事項：

・AIDIA事務局、及び主催国は韓国から中国へ引き継がれた。

・AIDIA会長は中国CIID 会長 ZOU 会長 (女性) が選出

・各国 (団体会員) AIDIAへ1000ドル/年間上納する。

50冊の論文と引き換え。

- ・このほか個人会員を設ける。50ドル／年
- ・各国会長ほか、3名の理事を設ける。加藤、直井、西出（日本）
- ・第6回AIDIA大会は規定とうり日本で開催。（2010年）
- ・主催国は3人／国 招待。
- ・作品集は会議開催国で作成。
- ・その他、北京で来年、IMI（国際インテリアデザイン会議）

■ 連載『インテリアの行方』

ー「世界ベンチ・イス創作コンテスト」に想うー

東北支部長 若井正一（日本大学）

最近、東北の地方都市にも全国規模のインテリア関連の大型店が次々に進出して、一般消費者のインテリアに対する関心が高まっている。また、町の大型書店には、インテリア関連の雑誌コーナーが設けられ、熱心に立ち読みする若い女性達の姿も目に付くようになってきた。さらに、若者向けのファッション・ブティックや喫茶店には、著名なデザイナーのイスに似せたレプリカなどが置かれて居心地の良さを競い合っている。その華やかな出店の影で、昔から長年営んできた町の家具店や寝装具店などは、いつの間にかシャッターを下ろして廃業する店が目立つようになってきた。それら中には、腕のいい木工職人が注文家具を製作する工房を構えた店もあり、彼らの職場が消えていくことは、とてもさびしい限りである。地方の景気が低迷する中で、地元の商工会議所が音頭を取って、「世界ベンチ・イス創作コンテスト」というイベントを始めた。今年で第3回目となるそのコンテストは、音楽をテーマとしたベンチやイスのデザインを国内外に一般公募するものである。応募者には、そのイメージしたベンチやイスを指定用紙に自由にスケッチなどの絵にして提出してもらい、その中から選考された数点を地元の木工職人が製作するものである。完成した作品は、イベント会場に展示されて選考の上、最優秀賞などの各賞が授与されることになる。さらに、それらの作品は、人通りが多い駅前の店舗や事業所が里親とな

り、店頭などに置いて大切に管理することになる。

そのコンテストには、幼稚園児からプロのデザイナーまで、数多くの応募者から多種多様な作品が寄せられる。

その審査に関係して感じることは、簡単なスケッチ画をもとに地元の木工職人たちが製作する家具作品の見事さである。例えば、小学生が考えたトランペット型のイスや70歳代の高齢者が提案したクラリネット型のベンチなどは、まるで本物の楽器のように巧みに造作されて、その座り心地も予想外に良い具合なのに驚かされる。

全体として楽器をモチーフとした作品が多い中で、月の砂漠などの曲想をイメージした「らくだベンチ」や、作曲家をイメージした「ベートーベンチ」などの変わり種もあり、実に楽しいコンテストなのである。駅前大通りの店頭などに置かれたベンチに家族連れやお年寄りなどが自然に座っている姿を見ると、とても嬉しくなる。

しかし、せっかく3年間の実績を積んだコンテストは、予算の関係で来年度からの開催が危ぶまれている。地元の木工職人が活躍する場が、また消えそうである。

そんな中で、私の教え子に、木工職人を目指して一人頑張っている若者がいる。彼は、建築学科に入学して間もなくイスに興味を持ち、早くからインテリアの世界で活躍することを夢見ていた。大学卒業後、卒研に続いて研究生として2年間大学に残り、木工職人への道を模索していた。木工作业には広い仕事場が必要となることで、いろいろ探していたところ、縁あって廃校となったある村の小学校校舎を借り受けることができた。彼は、都会育ちであったが、その木造校舎を仕事場とすることで、その後、その村に住んで、念願の木工職人を目指すことになった。時折、自作の木製イスを研究室に持ってきて私からの評価を真剣に聞く様子に、その作品のこと以上に小柄な彼の生活のことを心配していた。そんな折に、小さな村の廃校を活用して木工職人を目指す若者の生き方がマスコミに注目されて、地元紙や民放テレビなどに取り上げられて一躍脚光を浴びることとなった。特に、NHKテレビで地域のトピックとして全国に放映された時には、廃校を訪れる客が一段と増えたとのことである。その後、地元で結婚して子供ができたせいか、私の元を訪れる回数は減ったが、「案ずるよりも生むがやすし」というのは、このことかと想うばかりである。彼を含めて、夢を持ってインテリアの滄海に船出した卒業生の無事を祈る昨今である。

■ 編集後記

本43号は、2008年度の最初の会報です。これまで会報は「春の総会後」「秋の大会後」「年度末（年報）」のタイミングで年3回発行してまいりましたが、本年度は大会の開催時期が例年よりも早いことから、本号は「春の総会後」と「秋の大会後」を一本化した内容としました。

お忙しいところ、原稿をお寄せいただいた皆様に紙面をお借りして御礼申し上げます。

会報に関するご意見、ご寄稿などございましたら、広報委員会（interior@design.kyushu-u.ac.jp または JASISeditor@yahoo.com）までお寄せいただければ幸いです。

（渡辺秀俊）

■日本インテリア学会会報第43号（2008.11.17発行）

編集者：湯本長伯、渡辺秀俊

発行者：高橋鷹志（日本インテリア学会会長）

広報委員会：湯本長伯、白石光昭、渡辺秀俊
平井康之、若井正一、片山勢津子
平田圭子

■事務局

日本インテリア学会

事務局長 西出 和彦

〒113-8656 東京都文京区本郷 7-3-1

FAX：03-5841-8515